

特集

思考にきく 発問



「発問」は、看護教員養成講習会などでは頻出のテーマですし、教育のうえで重要だ、と認識されていることかと思えます。先生方は、学んでほしいことを伝えるために、日々発問を工夫、実践されているのでしょうか。とはいえ、教員の思い通りにはいかないのが世の常。学んでほしいことはたくさんあるのに、どのように発問すれば自分の思う教育ができるのか、発問のハウツーはないのか、という悩みのお声も多く耳にします。看護基礎教育は、専門職養成であり、国家試験もあることから、教員が「教えなくてはいけない」と思っている内容が過密です。発問をして返事が早くほしいのに、なかなか学生たちから反応がこないとなると、発問の方法が間違っているのではないかと不安にもなります。

しかし、もしかすると、こうした悩みは「発問」についての誤解が原因になっているのかもしれません。発問は、教員が教えたことを伝えるツールではなく、「学生の思考力」を養うためのもの。主役はあくまで学生の思考です。講義や演習、実習と、それぞれの場面で、それぞれの学生が何を考えているか、その思考を注意深く聞き、発問をすることが、学生のそれからの思考にも効いてくる、と考えます。

今特集では、「発問」とはどういうものを概説し、発問をつくる前提として必要な思考の転換から、看護教育の現場にそくして、その必要性和実践例をご紹介します。